せなか

豊田一秀

人間には身体の中で二か所だけ自分自身で見ることのできない所があります。それは自分の目と背中です。「見る」所の代表である目と「見られる」所の代表である背中、そのどちらも自分の思うままに見ることができないとは、神様のいたずらを考えてしまう私です。しかしそれだからこそ、この両者はことばより多くのものを人に伝えることができるのかもしれません。

たとえば背中が私たちに与えるイメージのひとつに悲しさ、寂しさといったものがあります。「肩を震わせて」泣いている人はおそらく私たちに背を向けて泣いているでしょうし、また「肩を落として」歩いて行く人の心中を私たちはその人のうしろ姿から感じ取っていることと思います。一方、私たち自身も人に背を向けられると悲しく、また寂しく感じます。

背中はなぜ私たちにそういったイメージを与えるのでしょうか。それは背中を見せている人が歩く時、普通自分との距離が離れていくということに関係があるように思えます。

しかし自分との距離が離れていくことは、悲しさと全く異なった気分をも私たちに与えてくれます。それは自由感

です。人が遠ざかって行くに従って、その人との心理的緊張感はさがっていきます。すなわち自分から離れて行く人の心の中に自分が意識されなくなっていくであろうという解放感を私たちは味わうのです。

そもそも見るという行為が意識するということに深くかかわっているのに対して、見られる側である背中はせいぜい気配を「感じる」程度のことしかできないのが普通です。

道を歩いていて前を歩いている友人の背中を見つけた時、友人の背をチョンとつついて驚かすのも、またずっとそのままうしろを歩き続けるのも、さらに気づかれる前に遠ざかるのもすべて見ている人の自由なのです。その人の意識の中に自分が入っていないであろうという安心感、自由感（時には優越感）は、しばしば私たちのふるまいを自由にするものです。

自由にされるのは私たちのふるまいばかりではありません。子どものふるまいについても全く同じことが言えます。たとえば、おとなはよく自ら働きかけて子どもと手をつなごうとします。部屋に連れて行きたい時、危険な時、仲よくなりたい時など、場合は様々です。

そんな時、もしその子が元気な子で、「いやだよ、手をつなぐのなんて」とでも言ってくれるなら、おとなの気も楽なのですが、内気な子の時などそのやわらかい手の暖かみから、そして握る手の強さから、微妙な気まずさや迷惑そうな感じを私は感じることがあります。

それに対して、私が砂場に腰かけている時、机に向かって何か作っている時に、何気なく私の肩に置かれた小さな手のなんと暖かく自由なことでしょう。

幼稚園の朝の庭は良いものです。落葉の一枚までが子どもに拾われるのを待っているような静けさ。すずめもにわとり小屋の前でつかの間の朝食をついばんでいます。私は出口のベランダにすわって、見るでもなしに乗り手のいないブランコを見ています。すると一番に来た子が背中にとびついて「ワッ!!」

「やあ、おはよう。早かったねー」

そんな一日の始まりが私は好きです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）